基礎講座

協同学習を重視する授業における指導案の書き方

松沢伸二 Matsuzawa Shinji (新潟大学)

1 はじめに

言葉は人と人とのコミュニケーションの手段であるから、外国語学習者は初期段階からペアやグループの形態で学ぶことが望ましい。また、多感な十代の学習者が助け合い、高め合って、共に学ぶ喜びを感じとる意義は大きい。ペア・グループでの協力的な活動を最大限に活用するこうした指導は、協同学習(cooperative learning)と呼ばれる。

新学習指導要領は「他者と協同して問題を解決しようとする学習活動」を、総合的な学習の時間に求めている。上述のように、協同学習は英語の授業にも必要である。今回は、「このように書くと、協同学習を重視する授業がより確実になる」という考えでまとめた指導案の書式を示した。以下にその意図と書き方を説明する。(なお、1. クラスの実態、2. 本時の位置づけ、3. 本時の目標は省略してある。)

2 活動ごとに学習形態を書く

英語の授業で実施される活動には、教師がクラス全体に向けて行う一斉活動 (whole-class activity), 生徒一人一人が取り組む個別活動 (individual activity),生徒が隣や前後の級友と共に行うペア活動 (pair activity),それに4人ほどの小集団で取り組むグループ活動 (group activity) などがある。

このうち協同学習が生じるのは、ペア活動とグループ活動である。指導過程で見ると、Warm-upや Reviewではペア活動による協同学習がよく行われる。Presentation は教師が前面に出る一斉活動が中心だ。続く Practice ではペアによる協同学習がよく用いられる。文章レベルでまとまりのある意味の授受を行う Production のタスクでは、グループ活動による協同学習がその中核を形成する。

協同学習は1つの指導過程の一部の活動でのみ行われることもある。例えばReviewで既習ページの音読をする時、「単語の発音に注意して、ペアで順番に読んだあと、もう一度全体で読む」という活動を計画することがある。この場合は、Reviewという1つの指導過程の前半にペア活動、後半に一斉活動が配置されている。

したがって指導案では、活動ごとに、一斉・個別・ペア・グループ活動のどれを行うかを、「d. 指導手順」の「学習形態」の欄に記述する。こうすることで、教師の意識が協同学習に向けられる。

3 協同学習の観点での評価を書く

多感な中学生を協同学習に導くのは容易でない。 性差や性格、それに英語の得意・不得意など様々な 要因が重なり、助け合い学習ができないペアはもと より、小集団学習に拒否反応を示すグループも出て くる。漫然とペア活動・グループ活動を計画するだ けでは、共に学ぶ協同学習は生じない。

ペアやグループの編成では、英語学習が得意・平均的・苦手な生徒を適切に組み合わせる(small heterogeneous group)。「記録用のワークシート、ペンをグループに1つずつ用意する」などで、グループ内にプラスの相互依存を生じさせる(positive interdependence)。協同学習の成立にはこうした配慮が必要だ。これらは「留意点」に記述する。

次に教師が期待する協同学習の姿を、「グループで協力して質問し、必要な答えを集めることができたか」などと、「c. 生徒の学習の評価」の[協同学習の観点]に記述する。またそうした協同学習を導く教師の姿を、「机間指導により、語彙や表現方法等について支援を行っている」などと、「b. 教師の指導の評価」の[協同学習の観点]に書く。

4. 指 ²	(1. クラスの実態,2. 本時の位置づけ,3. 本時の目標,および指導過程2以降は省略してある。) I. 本時の展開 皆導過程1 :				
b.	教師の指導の評価:[協同学習の観点] [他の観点]				
c.	生徒の学習の評価:[協同学習の観点] [他の観点]				
d.	指導手順				
	教師の働きかけ	学習形態	生徒の応答/活動	留意点	
e. 7	e. 板書計画				
c #	(町 ケッソ ドラム)				
f. 配布ハンドアウト					

4 相互評価活動を書く

協同学習は相互評価(peer assessment)を重視する。相互評価には、級友の学習を評価する行為を通して自分の学習にも責任を持たせ、自分の学習を評価する自己評価能力を育てる機能がある。相互評価にはこれに加えて、学習者がお互いにほめ合い、励まし合うことを通して、お互いの向上のために共に学ぶ人間関係を形成する働きがある。協同学習はこのプロセスを大切にする。

例えば Production の活動で、「中学生に携帯電話は必要かどうか」について、グループ対抗のディスカッションを行う場合、「賛成派・反対派のグループの議論を聞き、『意見のユニークさ』『発表の工夫』『グループの協調性』の3つの観点から拍手で評価する」といった相互評価活動を行う。この場合は、相互評価の実施方法を「d. 指導手順」の「教師の働きかけ」に書き、「学習形態」の欄に、「相互評価」とラベルをふって、活動内容を明示する。

5 おわりに

協同学習は、佐藤学氏の『学校の挑戦:学びの共同体を創る』(小学館、2006) などの著作でよく知られている。協同学習を重視する英語教師は、英語が苦手な生徒や得意な生徒への効果はもとより、生徒の学ぶ意欲やクラスの雰囲気の変化に注目し、実践に自信を深めている。協同学習は Practice と Production を成功に導くという点で、新学習指導要領の言う [活用する力]の育成にも役立つ。

本連載では3回にわたって指導案の書き方を述べた。指導案の作成は授業の予行演習になる。自分のために目的別の詳しい指導案が書け、参観者があればその要点をまとめた指導案が書ける。これも英語教師の基礎力の1つである。(本稿の活動例は、『英語教育研究発表会要項』(2008)より引用した。本要項には新潟市立坂井輪中学校英語科が、「共に学ぶことを通して、個の力を伸ばす指導の工夫」をテーマに行った実践が収録されている。)